

『#暗殺の森』(1970年、ベルナルド・ベルトルッチ監督)をNHKBSで視聴した。第20回ベルリン国際映画祭のコンペティション部門に出品され、1971年度のアカデミー脚色賞とゴールデングローブ賞 外国語映画賞にノミネートされた。原作はイタリアの作家アルベルト・モラヴィアの小説『孤独な青年』(Il conformista, 「体制順応者」の意)。監督作品に、「殺し」(1962年)、「革命前夜」(1964年)、「暗殺のオペラ」(1970年)、「ラストタンゴ・インパリ」、「1900年」(1976年)、「ラストエンペラー」(1987年)、「シェルタリング・スカイ」(1990年)、「リトル・ブッダ」(1993年)等がある。

本作は時代背景を知らないと一度観ただけではよくわからない。それに主人公の生育や心理が大きく影響しているようだ。

時代と舞台は第二次世界大戦(ムソリーニ、ヒットラーの時代)のイタリアとフランス。幼い頃のある事件を心に秘めた(同性愛者の青年に襲われ、反撃して殺人を犯す)哲学講師の青年が「優柔不断なファシスト」になっていく姿を描いている。個人的な心理的理由によって動機づけられたファシズムへの固執を詳細に分析したものであるようだ。

屈折した心理から、主人公 M はファシスト政権下のイタリアの秘密警察への入隊やファシストへの入党、結婚もする。そして組織の一員となった M は、大学時代の恩師であり反ファシスト運動の支柱でもある恩師 K 教授の身辺調査を任される。彼は新妻を伴い、新婚旅行と称してパリへと旅立った。そこで教授の美しい若妻 A に魅了される。間もなく組織の指令は、教授の暗殺へと変わり、M の監視役として屈強な男が、ぴったり張り付くようになった。そして、ある森周辺で暗殺を実行する手はずを整えた。その森で暗殺の日を迎えた。教授の車が出発し、M の乗った車も後を追った。M は教授の車の助手席に何故か A が座っているのに気づいた M は焦燥に駆られる。山道の途中で対向の車が教授の車を塞ぐように止まった。潜んでいた組織の暗殺者たちが次々に現れ、教授をナイフでめった刺しにした。A は車を飛び出し M に助けを求めるが、彼は動かない。A は森へと逃げていく。そんな彼女の背後から暗殺者たちが銃弾を浴びせ、A はやがて息絶えた。

それから数年のち。時代は大戦末期に移り、ファシズムも崩壊しかけていた。街路で M は信じられないものを見た。街かどで熱心に少年を誘っている白髪の男、それは13才の自分が殺したと思っていた男だった。自分がファシズムに傾倒した理由となったトラウマは、皮肉にも勘違いに過ぎなかったのだ。そして抛り所

にしていたファシズムも今まさに崩壊しようとしている。混乱した M は、いずこかの路地裏に崩れおちた。その放心した顔に揺れるろうそくの明かりは、来るべき彼の崩壊を予言するかのようだった。

作品の中にメタファーとしてプラトンの洞窟の寓話がでてくる。イタリアの状況をこのように捉えたのであろう。

映画評論家蓮見重彦氏によると、劇中、M が教授に電話をするシーンにおいて、その電話番号が映画監督ゴダールの自宅の電話番号であるという（そんなことまで知っているのか）。このことより、蓮実氏はベルトリッチにとってゴダールは殺さなければならない恩師のような存在ではないかと指摘している。プロの深読みはすごい。

イタリアの暗殺事件

特に有名なのは 1978 年に起きたアルド・モーロ元首相の事件である。彼は極左テロリスト集団「赤い旅団」に誘拐され、55 日間監禁された後に殺害された。モーロはキリスト教民主党の党首であり、イタリア共産党との「歴史的妥協」を進めていた重要な人物であった。彼の死は、冷戦時代のイタリアにおける民主主義の理念に深刻な打撃を与えたとされている。